



北窓瑣談

後臺

15
1601
5



48
1601
5

飛茂
藏書



北窓瑣談後編卷之壹

梅華仙史橘椿軒著

三月十日
十四日
不男友



一 肥後之敷屋下先生大坂の中井若吉先生に
訪ひて因冬より一が為那織成者なり中井怪し
て之を以て礼を先づ少く及衣を着せよと仰し
小敷を以て答へて亦許さ
るは此の如し

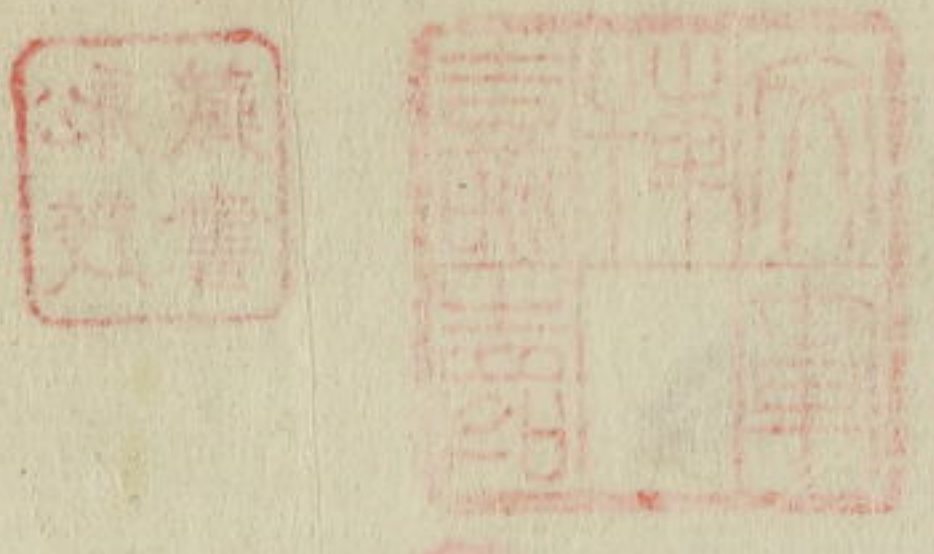
一 丹波の田邊城下より三里半田舎の溝尻といふ所より医
生あるを學ぶに去るのありしに其物語に在所を
紙書とすとの成りしがと申す京よりして初
め及ぶと申す又正月の門出に
初め及ぶと申す又麻上下といふと申す
高橋といふと申す



雜多しと僅廿四里の地とて之を御領すの事又日向
 高岡とて所を藩厚領とて御士の七八百軒と集り住
 する所城とて隨々繁華の地あり不絶とてよまて始
 此等の島席の事とて貞享五年の鹿兒島の侍陣の
 唄をうたふ事とて是名ありて於鄙の遠く或又人氣乃
 厚厚とて取らぬやれや

一因懐の河田ハ州周易新疏を著して後形神ノ物語ノ
 家技柄をうたへ是福の佐乃如き事といひし所なりや
 下りといをれし事とて空乃法と思ひ

一近所頃太閤真蹟記とて字平阿の玄大部とて數百卷ハ



及なり太閤時代の軍物語を要綱に記して信長或は
 書けり世上に實録とてとてや片是ハ大坂の淨瑠璃平の
 作者近松並木多々流る言成面高けり連子なるや近
 年淨瑠璃芝居流行せり也作者は仕業なきや小たり色
 々乃歌打騷初年又軍物語の流り之等或面高けり初
 て俗人を悦しめ利を好むなり淨瑠璃平ハ婦女子學の初
 其とて其書をうたへる言成面高けり是等ハ
 皆實録傳不傳りたりまれば俗人婦女ハ其実の事とて其
 女し物細多し人との事數百年の遠真傳多し人乃
 逆ひを生し人なる事何れ其傳之悪し人なる事云傳之

人と在念のふやて依者大身罪ちてしとれを憎むる歎

く命紅軍なる

一醫術の妙にまれり者ハ扁鵲なりて天よりて医をふりハ扁鵲なり
とくちろ一し道を以て衣食を計るものハ術の妙なる
変叶之よりばさハ身の境界も扁鵲がどくあるべし

此一段人の甚難人との取やして世間ハ扁鵲ありのん人

一五雜俎曰鶴即鶴也漢黃鵠下建章而歌則曰黃鶴

一梓 和名アツサ書籍を彫る梓ナリをむしりハ又梓木

成以て棺ハ依り墓ヲ移るなど日本中ハありハ多死ものとも
然るもそのハ真の梓ナリハ多知人稀ナリ命も久しく人

中尋問ハも其の梓ナリハより其の梓ナリハ又アカメガ

ニハナリハも其の梓ナリハも其の梓ナリハも其の梓ナリハ

より平松殿琴の裏板乃用として美濃土梓山の梓の木と云

らさしそ葉の形らりのなりや命其板ハを重しりハ葉を

辨ハ後ハ五雜俎依續たりしとれ梓也楨也楨也楨也楨也

章也一木而數名者也云々 唐土ありし辨ナリハ命も

同種類ハ物と思らるるハキサケハアカメカニハハハハハ

とれハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

一前の恥前屋書成善くして印章ナモ更惣鎮と彫るハハハ

又此門鎖鑰と彫るハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

二重切の花生々々世々八何方々も用ゆれども無風流の物も
いと見若し利休乃此を猪子物とて花乃けり先々其の
しよのうし座つ物し人々見を物と見をて又狭き
座敷に魚をうけら上上亦花をて生たつ八息多たその
なり掛あ々花々一方乃ういしと事をし

一茶花物語を其れを圓融院の御物とて後々最茶氏とて
其し小野道風等の萬葉集貫之自筆の古々集ふと見
るる然るもその代りて古筆を其人の貫之自筆の古々
集の序紙に所持昔人多し余が親死人の家も是を藏
るる茶花物語の以り希代の珍物なれ今々序紙

とくも毎双の重宝なり

一蘭陽先生中身を過る以りその書ハ余毎度見多し一が大
小又見ふ六者とり然るも人々物語に蘭陽晩年の物語
に字同片又先子及む次但書ハ先子少し勝りうと覺ゆと
いれしとがうなりや

一肥後初玉山の洗竹詩十世上風骨予何嘗至此同敬窮
飛鳥愛洗竹出前山 其後數夜に洗竹の詩十 洗竹
見青山々々露半親不見山猶可唯恨月出遲寄言山中
抱琴客未踏林間初月白 後夜洗竹作り揚るる似
々々然れも五山の詩絶て日本の風味無し

一元の謝宗可の綴物の詩と釜の蕪音を親筆と指すは松
風蟹眼をといひ古しきを珍しくその的切り形容せし
ゆに世乃詩人の奇字を競い用ゆるも故に凡六ありて
一は後福山の家中内着何某とよみ人或時疑ふ出づるしに
馬蛇を足付たるとを歌きて詩くおまをさすききまてま
甲子入るをむむのしより頻うておて君歌はれどもほい
足多のぬ響程つくとぬ僕兄高きを草中子蛇死しをまると
若しを内着おて秋をゆえ乃んといふ同を蛇既取河け
内着お向い畑中の煙乃とるよみ取吹くかき細内表
りたの月お高うて蛇ハをば倒れ死しる内着か眼儼工

痛てをれ何より寒熱おく苦悩言んぬあり既に余もま
多く居るし蛇工内着煙早の葉乃蛇ハ毒を殺す致思ひ
おして煙差のやにを眼中に入きし小瀬と工腫消し痛
やうなて一日斗子苦悩退れ眼赤死をわたりたり六日
お小を入きたるは五六日して今癒うり生翌年生時節
又眼痛おしたる色々の眼科医の治療を施し流し癒
さるし蛇毒の毒を思ひおし又煙管のやにを入きし小
息も愈たり二三年も生時節より必眼目痛おはり生
後らやにを入き癒ぬ此書村上彦峻お流たり現又云蛇
を打し人き物お流門と云人きく毒お高きし人の生庭工



舎牙實林泉列子於く品今廿死侍終り味方敗ゆ及
所りよま人長慶社所りまし出陣ししくされば生の
以り及し成る本の此の相く尸をとけりわりとりの
捨てまし出陣せしれしとき

一和泉武岸和回領然元谷とふ所上四子を産を泉列成田
一左近物語所寛政七年乙卯吉のとき

一余嘗て源氏物語を多時源氏乃君の琴をよくしゆひて
廣陵散の曲を彈しまりとりふと何れも此曲乃晋の阮籍子
て絶たとり或は源氏の彈しまるをしや何れも不當言ふ
れどとき不當乃半なりと思ひしかと後琴徑を讀むも唐

の顧況廣陵散乃紀を引く唐瑯琊王淹り女未算彈此曲
云々これを唐の世なりも廣陵散の曲を傳くとりと思はる本
邦の蘇才唐細を考ふと古代の風なれも式部乃以も實
此曲を彈せし人なりともいひしれ也

一前書とりの書乃京師の神法乃某致はの後杜はと名章
く市中小隱と位乃時の作なり前廿二百卷成就して
後行進年の奇才多れと筆を為先しとて塵泥と名
付る書四五十卷を著せり皆進世の實録なり上三公乃
下度氏子到る乃乃の雜事を撰り此杜は齡八十四也の因余
始をく智人子なりて問を尋て隔意なく物終り温厚柔和

の質を以て後居せし後ハ五年を経営するも其路をゆくも其
 実ハ世外乃真隱なり其死後ハ再諡して物法り皆年談人
 或亦余彼菴に尋て例の筆譜の中余の著述乃中少也遠
 慮がた末多き純く世間塵くハ切れたるも亦有りかど公
 リキに冠色を正しく足下ハいふは此年の事下れを以て後著
 書も多きなり平常の事ハ随分採りてを以て分ちたりま
 一但筆を執るハ所も遠慮の心を起して分ちし遠慮を以て
 世間ノ憚りもハ實を多し事多し前著と書ハハ天子將
 軍の御手にも柳遠慮を以てたり實事のみ直筆す
 記ハ是れも親類朋友再度諒免を以て字中下れハとて

いふく世間ヲ洩出はせられたるなりこのなる忌諱の事ハ
 一細くも罪を以てせられたるハ何れも高貴の御手ハを以て
 一ハ切て居りて罪ハ實録ハ後世にも傳ふ事ハ是れ善惡
 一ハ下侵せし人乃過なれハなく高貴の御人の事ハありて
 一ハ女ハも狂て實を以て欲せし此実録乃事ハ實に
 一罪を以てハ十の先前乃白髪首釦らるるも恨み筆記の
 一事ハ對して初より一命を以て歸するも世間高貴乃
 一人の思も憚りし事ハ取たり然れ人乃善事ハ稱美する
 人掃りて返りて世間高貴乃到りて足下

ぬく筆を批りてハ何事と云ふに遠慮なく云ふ事と
傳へて云ふ事し 漢ノ箱の志 歎然として筆を握りて
古の良史此風あり人あり也

一行年唐土より大清會典と云書を関東へ献せし事乃有
し其中今乃清朝と清和原内乃流を以て源義經の
本裔たる事を載せし然れを唐土日本因縁下見ふあり
所ぞ此書官より名處され方其副書一部を長崎の唐通
事神代氏致し名をて家子藏し其神代乃子息大仲常々
之を以て其書白紙摺りして二枚半を以て宝美麗下見ふ
書なりしを之を仲常之れを余と同街の時物流なり

其年と白石先生乃以金史別本ヲ載たりと色々沙汰
ありし事あり白石も半を信せられしなり新安手簡の中
亦中へ記さるるに後と年久矣流分りて珍奇の語と歎
有る事あれども畢竟ハ浮説多し其書小神代子
實小なる事しと六奇中の又奇なりとあり
一行後程帝ヲ我邦入清和原氏唐土の祖先なりといふこと
大清會典より書しありといふを浪花の菟葎堂の主
持物語より彼れも先年々の大清會典を所抄せしを
後或諸候ヲ奉りし其書十六帙ありて云美麓の書乃仕
立たりと菟葎堂の好しと云の清和原氏乃半さるる事及を

さきしきとくハ疑しくハ虚説ましく神代氏初サ乃時のこと
史ノ足徳里々々不々々其書ハ々々其候乃所藏ありと云

一先年濱岫山豆嶋海中より引上たりし龍骨を大方不物

とく奇異の物なり致込来の物産学者象骨たりと云

色々乃諸説何れも立難廻り司徒馬茶飯治河日。於淮濟

間得一龍蛇長數丈鱗凡鬚角畢具。其骨堅白如玉云云

所乃の事凡事も何れハ度死天地間純のなりと云

一余り後置り福列種の鴨脂環を硯に置しり乃をしり云

實乃を置り一二年ハ既小色付熟したる云一日を熟し乃を

一穂を唯二穂刈り云一ハ生同産穀く集り云て満

園より櫻一粒も残らざるを嘆き其甘りをもて禽獸もよに人の手

さぬるハ盜ぶるもよたり伊勢の南方乃山中紀列熊野の

東北の山中あど皆柿を夥しく種々産業とす生辺極多

なり中人のふさふさの間と極盜むるなりと云一ツあり人取

致居り數百千乃獲来りて一二日のるに満山ハ柿を盜

りて人遊り防たれ故ハ柿ハ熟すと致待り一山一村の

人言合せり一日のるハ皆柿を元をを奪たり地事五雜俎

亦も居えり國中の蒞支人一度元れも鳥獸集りて防ぐを

りて防ぐを

一先年濱岫山豆嶋海中より引上たりし龍骨を大方不物

一安永年間のことありし城外ハ幡乃辺の野外ニ猫の死し
多きを食ふ歎有り其形を大なる次大依猫能ありて猫
あり多し次ハあり次ハ人立寄て見る人をも怒りて猫
肉食ハ年々を定る方へ去りしハ乃ち多く群を成り
て咬り死す此歎の一咬を大告立所ニ死せり人乃は
泣せハ黒告といふ歎をともや去る死といひし余が家の儘
負助ハ幡の産まで此事を語りしといふ

二近江五日野より一里半の山中ニ石塔寺持といふ所あり
其所ニ大なる石塔あり世ハ是を阿育王の八萬四千の宝
塔の一ツなりといひ傳ハ江漢の筆死ハ其辺の山中あり

宝塔の石乃崩き倒れし方が夥しく有り今も其石を築ぬ
組建て阿育塔といひて建すといふ有り何れハ代何れ人々
阿育王を造り至ししハ交結すも法蓮死地ハれし日本
ハ記録なしといふハ去れりし

一平清盛相も小松内府も命し近江國琵琶湖を北海へ切
落し新田を築えしと敷賢へ越る道中塩津の山中塩坂
といふ所ニ切開けりし迹々小坂あり近來河村松浦
ハ車又此ををりぬ北海へ湖水を築きんと其標れとも
千本あり次又東山岡場派といふ湖を切落し新田も其を
て先年ハ善後ありしと云後其年十今ハ成りし事

とて、但神代の以紀後子阿蘇乃湖水を乞乃川尾一切
爲と理今二萬石乃田地と成りて云余先奉至地理を
見し人カを以て切居せし事疑ふ多し之を跡尾の是
りし其切居りともをえし唐土にも宋の王前公政を執る
大中天下の水利を興せし時大湖乃水を切居し新田を置
久より其策を献せし人ありしと五雜俎を名をりし如漢在
今人情ハ遠くくもの物なり

一繪餘雜録ハ記列の善齋道慶の著述ナリ善女ハ惺富
先生の門人ナリ其書中云孤樹哀談小菽園雜紀を引く
明英宗時嘗有人臨刑以三覆羹得免或問當此時自覺如

神如何云既昏然無所立但記身座屋皆上下見一人面縛
我妻^王子親戚皆在傍女頃報至才得下屋云と春暉を記し
明人の書此中をて見し事のたし小人答ふる事ありしに
後友人問之痛苦堪りしや有らん云ひし小娘乃能其痛
苦を覚えし後ハ唯我身の苦打り成違乃下の言ふ事しと
ゆゑふし少ハ痛苦を覚えりしと答ふ楊椒山先生嚴
嵩^漢乃漢劫也一時の事やありしと云く小覚えを医論の時
小此事を引く神気乃併に離る澄とすりと之此以るし
繪余雜録中似し事のたしと云ひぬ
一本邦乃字者作文子音借僻字を用る時ハ多ク漢土乃人

の文中に是れは例に依りて用ひし之世乃人多く此語何
乃書出所なり此字ハ何處出處ありといふ皆川乃史記即字
法凡例などし是を出處と考へ元來出處といハ士朝
みちく侍人より家小處で隠るゝある人多く何れ書出
處ありといふ事無覺東本と異ひし佐野女進物語に老
学菴筆記小今人解杜詩但尋出處不知出處之意初不
知是云々又末處と云事有り通鑑注云作文不可無來處
云々又野客叢書劉禹錫曰詩用僻字須有來處云々是等
の事近世の人より出處小述し又冥谷子のりいし人出所と
云ふより出所出と云ふ事猶久しと云ふこと思ひし

一甲斐玉鶴の郡子二十餘年乃病あり從末三羽有りりり
元録年同十一羽死す二羽の之歿し何れも不實政五年
何方へ去りたりや凡そ土俗乃況ハ日経天去りり云々此霍
乃郡ハ富士山の麓より湖水と多く衆山連て後一奇妙乃
僻地なりと云病の郡と名付し事ハ此霍石不故ハ病の
國なりといふ所ハ何れも富士山より北ハ病の郡と云はし官あり
ゆえなりと云先年病の死せし時ハ後人下向ありと云
細を改め羽毛ハ悉く道納まりと云土俗の云何ハ秦の
徐福富士山小来り仙薬を求めたりが還小秦小飯りど
此所小館して後より病小化し名かりと云此事甲斐玉鶴

金印なりと云ふる篆刻家あるの統ありて製真十漢朝の
 制度小川つり偽物なるなりと云ふ浪華の上田秋成考云
 後漢書東夷傳光武今本光武中元二年倭國奉貢朝賀使
 人自稱大夫倭國之極南海也光武賜以印綬云々然も
 今穿金若金印ハ光武賜ふ所の物々中元二年ハ日本無仁
 天皇八十六年ハあり今の天明四年を千七百十餘年ハ
 馬小倭奴國ハ日本の惣號ナリ故古昔籠城ハありし
 名ナリ魏志小呂宋ハ伊都國即是なり和名抄ハ籠城ナ
 怡土郡あり又同國宗像郡あり怡土ハ里ナリ漢ハ通セ
 し倭奴國主ハ幸右ナリ又伊都津彦伊都縣主竹守の号



併見(一)と云々秋成の考りも明白なる也

一寛政の初余病々伏見ニ在リ以痢疾をやして久く臥在
 々々百度余進き利ヲ後ハ飲食も絶て數日ハ及び候上
 々々ハ火ハ危カレ侍々々々余ハ心々々々精神共しも病れ
 々々唯身の極苦ナリと云々々々教日絶食の場々自々々足
 々々々初々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 鼻ハ殊乃介々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 芋大根の類ハ物々列々々々々々何々々々今何々料理
 々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 残も々々々々鼻を穿つ種々々々々々々々々々々々々々々々々々々

を隔り筆を揮せしをて皆小を律毒細く分る今八調
 へり八音し今の曲ハ七位し之を盲人法師の律を安んずる
 福小分る余心も思ふ小病に似たり他念あり所在る故
 如地たる小やと心持在たりしと後日教を病疾癒え飲
 食者のもつたる小到りてハ鼻の香嗅を安んずる常小其たり
 小耳も以前より小成て中々盲人法師の筆乃律を安んず
 りしと小稽察たると何んは是れ余く教日施食しと經
 絡空虚し血液清稀なりし故神の走り伶利なりと鼻へ
 ても耳も達せし故なり是とつと思ふ仙人道士の殺を避け
 草根木皮乃至を食しと血液清浄なりしハ神氣靈通して

奇妙なりとみくもむるあり

一首五拍の音孫某殿乃家小貴公乃神靈を奉り時移神楽
 用野樂各數多傳へられ

- 磬 雲形 有衡柱 ○ 反尾 有撥 有巴 青海皮 木鼓 内ニ動リ
- 羯鼓 大鼓ニ似テ脚長ク シラヘルアリ ○ 銅拍子 トヒヨウシ 撥一文字ニ
- 編佐々羅 十六秒 拍板ナルカ ○
- 久楚 六絃或用七絃 壹布リセ絃琴ノ如シ

右八種の樂各乃書付彼家より出写し賜りし傳りし春
 暉抄より久楚ハ空素乃文字ナリト經久後世ハ陸水
 看し空素の文字乃半成ト知り人稀にして唯文字ハ

しつとんと深く可んしへる時六知りて世境に入る
下り相古乃真の秀逸といふゆゆの如く其のくく之を
久方乃光り世空居善乃目志つ心ゆく花のちり人
由られ戸我渡る五人を成た思外事し其ゆゆなる
一 堀ふとの宮上流分山の井乃可んし人よあれゆる
信者此松を秋風吹くふと急形海を河津を浪
大り六月其をめてし是をよみ付れ人の光とあり
是等の形と初より西あくよして善と成し人と巧く
二 更乃痕あり安し紙瓦乃信といふ事しこれを其の秀逸ハ
強て動なり好なりよかゆゆの信は其の力なりゆゆ

人乃見識言なるよれる

一 貴之所恒の優劣を人の同しと後頼の祈恒と乃山昂
参ししと後頼眼力無なる可んしと祈恒の

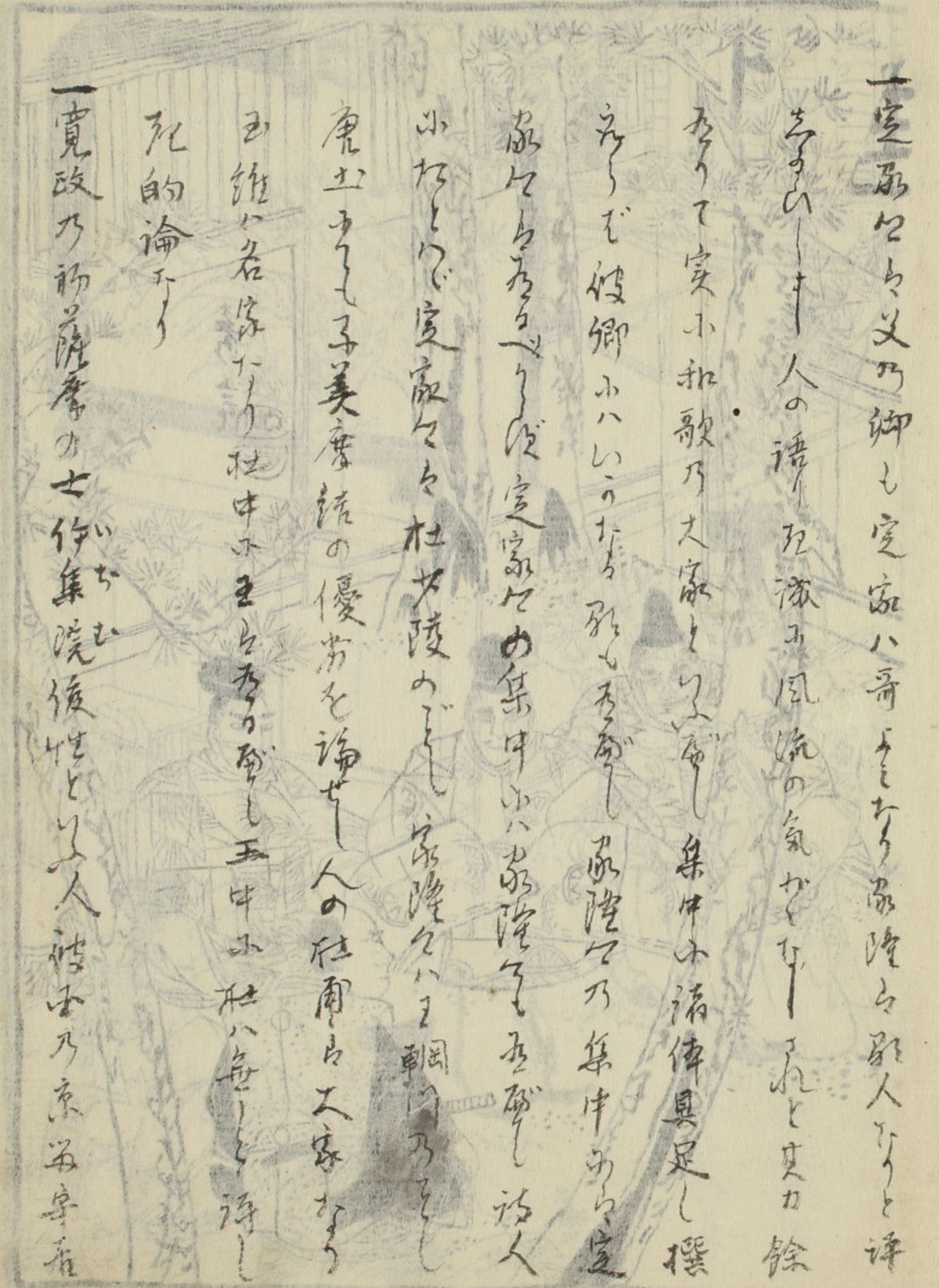
山甲を移しては信しりれ座の所善し用を賞して
たを悔ふハ古拙ありてカナリ後世乃人此乃善文ハ可んし
貴之をむりもそと人れ亦人ハ可んし和歌の解ともそと
はしと後世理屋前之鼻祖より一帯凡死多し

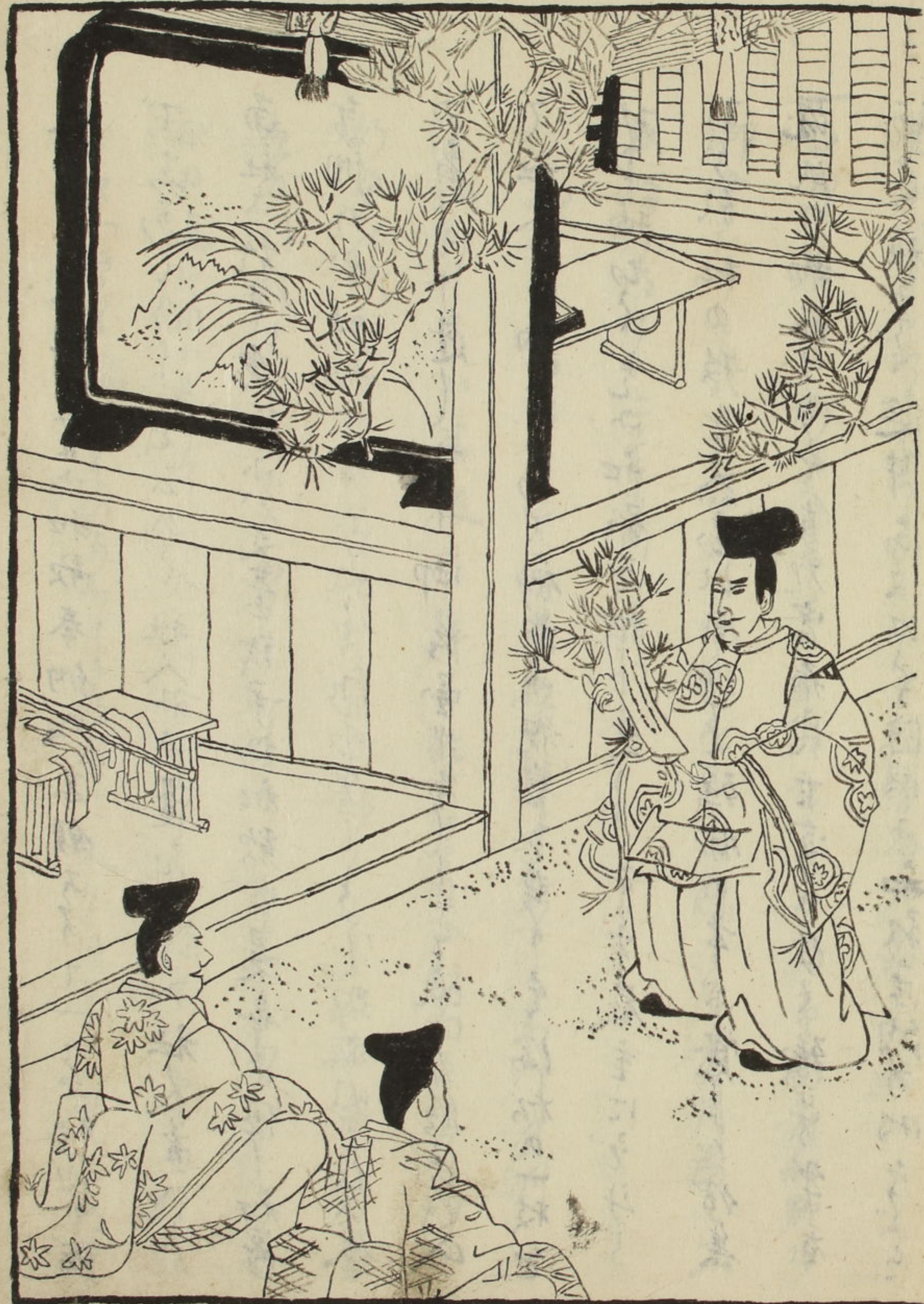
一 橋安の本の下風さむくそそに可んし如雪を降る
人占いのゆゆを可んしは花を世の善と白ひる
是等最人日に輪安し其ゆゆの善と善と善と

て想凡の氣無し第よら此歌ハ理窟中ハ餘情有りて想凡
乃境ハ色無し古々集子ハを此歌を歌ふと云ふ名ナ立てし
一和歌ノ年一ノ病ハ理窟ナリ理窟ハ縁縁ナリ和歌ハ何
ら申しを餘情を感さふ事人ヤ才二ノ病ハ引ケけたる
詞ナリ一人人々よりけ焼ヤもいふくふめと結ナリ
去来躁しく心迷す然し男乃物を争ふナ似たり此歌ハか
けら初ハ無し南原ナキ人ナリと云れ何とも可也子く
さしおとんと思ひ止ハ大なる事人ナリ無原中ナリ男乃胸ハ
引明ら初をなすも命し子切身を云も死ノ一伴をほす
中ハ安中ハ云と云れ此ハ何とも可也

一定歌ハハ又乃御も定家ハ哥ナリ歌人ナリと評
ありし一人ノ語ハ源ハ風流ノ氣ナリ云と云れ其カ餘
有りて定ハ和歌乃大家ナリ云云集ハ中ハ諸傳具足し撰
者もむ彼御ハハいふた方死も有るし源隆ハ乃集ハ中ハ定
家ハハ有るし定家ハハ集ハ中ハ源隆ハ有るし詩人
小ナリハ定家ハハ杜女陵ハハ云々源隆ハハ朝野ハハ云々
唐ハハ云々子美唐詩ノ優劣を論ず一人ハ杜甫ハハ大家ナリ
玉維ハ右家ナリ杜中ハ玉と云る事ハ玉中ハ杜ハ無しと評し
死的論ナリ

一寛政乃初ハ薩摩ノ士作集院後世ト云人皆云乃京五十年





彼乃是以位官小和歌奉納乃志願ありて一とを彼地の語
で志願し乃を云ひて社人又是を乞ふ社人者へと
弟社小族と連歌小文甚成可也和歌小是舞伴和歌
多細乃式神秘の事下れと此の事もさしかりぬて願供
の者了。中達しやぞ御意量中辱しとそれり時りい入
て社人者、西三峯也神前小祝言を乞りそ後松の一枚を
切り取れと見小和歌を供し更とくそ奉嚴主にを斗う
ひ多れ松の枝を文藝に用りて強勝の事不覚とと作集
院氏の物語しとそ在凡宮庭小古宮も多く強り年有
何と社人者、途中ありては除時小和歌奉納の時を乞

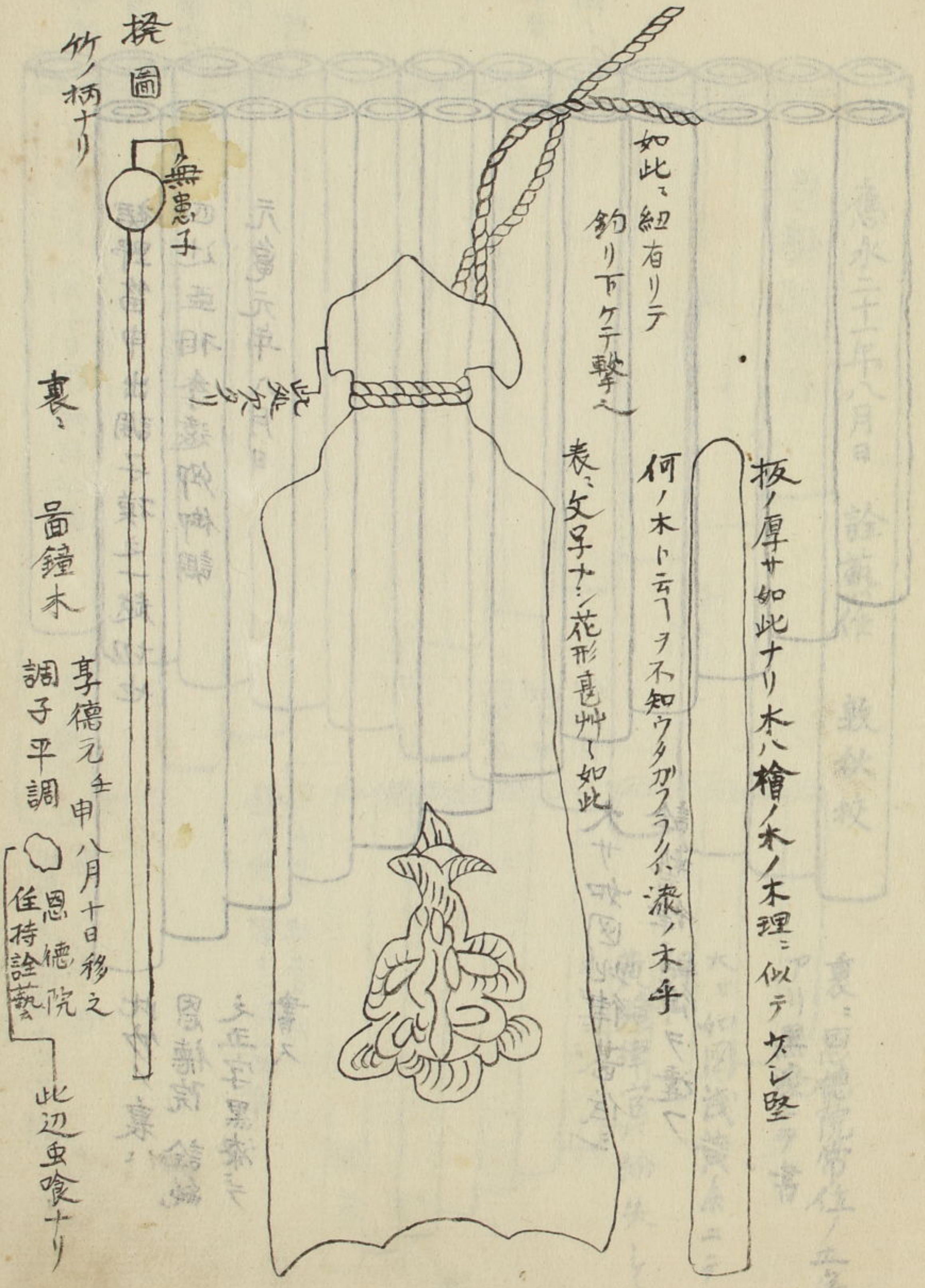
是小似よりなるものなりし加るる也

一し卯の春吉方御方へ奉りて年小ありし小折節高座和歌乃
御會たりれば、春暁の光を乞りて春月也と又
秋探り得たり二その内一層ハ

花多ハ委はしとて春夜小折りて安らふ事乃夕月
と詠ゆしこれハ其趣乃許りて不可得り不統向するハ可
初冬死所を乞りて七八分目小折りて社歌あども是言
夜の月影を乞りてありて春夜ハ中やありし上の句
小月過れば是も下りて合するしと詠とい中句乃詠
小々つきと採せしありて是乃又夕月とて是乃是言

律を拜ひしりか論考声のこを写して切りたるものなり法不依り
 て切りたる後ふたつ河波論摩ハ體源抄より恩徳院の詮
 摩とてその以考律の塩能なり俗氏ハ俗人家の舎才なりしか
 此の舎才又恩徳院の住持下り去目局の内才也國初乃
 以ふハ高路いありし人あり慶長元和乃以の人なり乙卯の
 年十月十七日去目局再ハ東儀出雲守林日向守林雅樂大
 允同道して遍照心院塔中實奉院より律考を以て終日
 吹合して試定て書を以てり

大サ厚サ莫ラ
 寫不此因ノ如シ



享徳元壬申八月十日移之
 調子平調
 恩徳院住持詮藝
 此辺虫喰ナリ

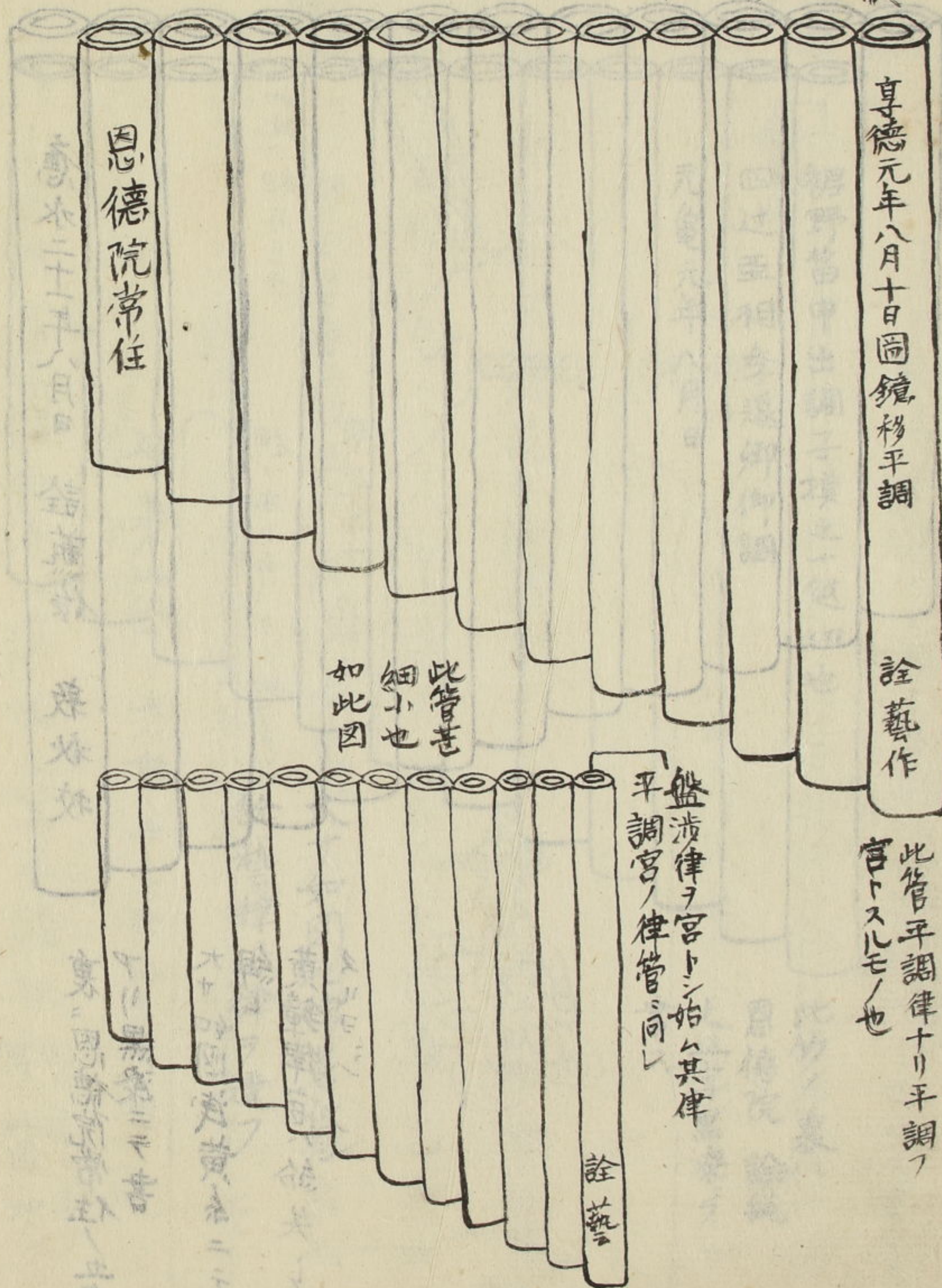
春暉家藏
ス凡律管
符合又當今
俗人家用
律ヨリ一律
高シ

竹管長廿
大寸此圖
如シ

享徳元年八月十日圖鏡移平調

詮藝作

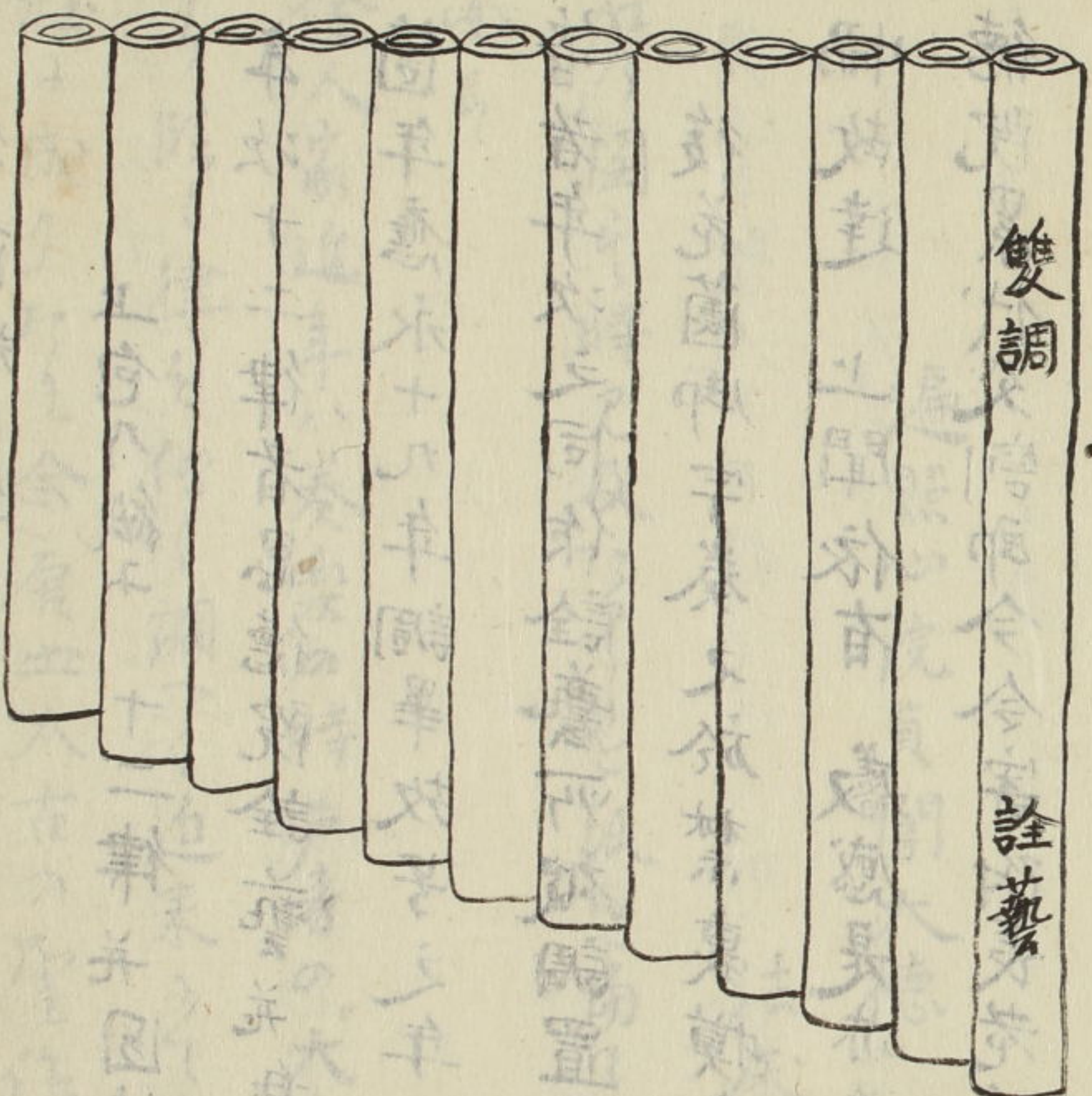
此管平調律ナリ平調ノ
宮トスルモ也



雙調

雙調

詮藝



大寸如此圖
其律如平
調宮律管
平調
其律如平
調宮律管
平調

高所也

寄附狀之写

上包乃紙子 十二律并因鐘之寄附狀

年次十二律者思德院詮藝并樂人敷秋此西人歷十二箇年應永十九年調畢故号之年次双調切黄鐘盤涉之三管者年次之同作詮藝所被調置之也兼又平調鐘之摸者後花園御宇奏之於禁裏摸金於本金木雖異者律相悞故達 上聞依有 獻感是亦為靈寶自爾以來雖為思德院累代交割即今令寄附長老坊者也皆雖非法會之器唱明梵唄助音之具也以之及末代正於衆僧之音藝我願望茲滿而已

思德院

元和三年己未仲冬十五日

詮譽

遍照心院貞闇大德

法床下

右乃因之時及及了を紙を尚了写しゆとて又添し

一伶人家近年ハ奏樂の時声音の大なるを考む事小なり
有り律を傳く調へて迫来うと在律ハ一律をたふし
福子成りたり余肩土太古の聖作の律を史記國語漢書

等ヨク考ふる事あとの律より一律より多くある余が著書
 所の古律考葉量述言小書一記せり志くも伶工家ハ
 其家の事りしは余が著書取用せしむる事一が近年
 小あり 聖上聰明小書一 辨文樂律の事ハ妙の達世
 了せぬて脈々御技正るる漸伶工家も其律高くしり余
 う考ふる聖人の古律と同じ脈々成たり遍照心院詮藝の律
 をゆふ余が考ふる律と同じれが其徳の正近ハ古声を文くを
 ちしとるる事元龜の以ふ事一ハ其律今のより後なり
 ありしは其後代乃考ふる事其後代を考ふる事なり
 此憲瑣談後編卷之一終

原書



